

# 看護業務量調査における時間外業務の検討

The examination of the after hours business about the nurse business quantity investigation

看護部業務委員会：太田 君枝・澤谷ゆき江・松本あつ子  
根井きぬ子・三橋真紀子・新倉千恵子  
塩原喜久子・西原 直子・高尾ゆきえ

## 〈要旨〉

業務量調査結果を、時間外業務に焦点をあてて検討した。昨年までは1人1勤務平均の時間外業務時間は60～80分であったが、本年度は104分と増加した。平成8年度からの推移でみると、看護婦経験年数によって傾向はみられず、勤務別では夜勤より日勤の超勤が多い傾向があった。勤務前の時間外には情報収集・薬剤業務、勤務後では記録が多かった。超勤時間は個人差が大きく、また病棟別でも310分から2435分と差があり、最多は過去3年間とも同じ病棟であった。

## 〈キーワード〉

看護業務量、時間外業務、タイムスタディー

### 1. はじめに

看護業務量調査をして業務内容の分析を行なうことは、看護管理上重要なことである。1982年(昭和57年)に日本看護協会の職能委員会が看護業務を35項目による分類し、ワークサンプリング法で全国調査をおこなっている。本院では平成1年より日本看護協会の業務分類項目を使用し、タイムスタディー法を用いて、毎年業務量調査をおこなってきた。結果はその都度婦長会に発表し、業務改善の資料としてきた。今回は過去5年間の時間外業務に焦点を当て、看護業務改善に資するための分析をおこなったので報告する。

### 2. 方法・対象

本院の業務量調査(平成8年から平成12年におけるその年の10月第1月曜日に勤務していた看護婦全員のタイムスタディー)の時間外業務の結果の分析をおこなった。

### 3. 結果

#### 1) 時間外業務時間の年度推移(図1)

勤務員1人1勤務の時間外業務時間の平均は平成12年が104分、平成8年は79分、9年は77分、10年61分、11年は62分であった。平成12年度は個人差が大きく、少ない人は0分で最高は350分であった。

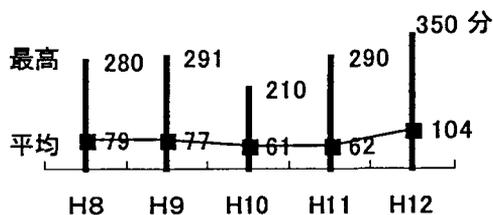


図1. 1人平均時間外業務時間

#### 2) 看護婦経験年数別比較(図2.表1)

個人的にもっとも多いのは平成12年度の5年目で350分、平均では平成12年度の1年目の142分

が多く、少ないのは平成11年度の3年目の45分であった。

婦長は過去5年間のうち平成9年10年11年と1番に多く、平成12年は140分で2番目に多かった。

表1. 看護婦経験年数別時間外業務時間

平成12年度	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	6年以上	副婦長	婦長
最大	305	270	210	245	350	260	230	250
最小	35	0	0	30	0	0	0	80
平均	142	118	72	121	115	88	87	140
勤務人数	21	17	9	21	5	75	27	15
平成11年度	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	6年以上	副婦長	婦長
最大	150	290	120	110	190	190	190	235
最小	0	0	0	10	0	0	0	20
平均	75	60	45	51	51	59	66	92
勤務人数	26	19	15	9	20	62	29	14
平成10年度	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	6年以上	副婦長	婦長
最大	135	135	210	145	210	190	135	140
最小	5	15	0	0	0	0	0	30
平均	64	64	49	53	74	62	54	84
勤務人数	17	13	23	14	11	87	26	14
平成9年度	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	6年以上	副婦長	婦長
最大	181	160	170	190	291	210	150	180
最小	0	15	0	0	0	0	0	0
平均	86	67	72	68	85	70	76	105
勤務人数	21	20	23	13	27	71	25	15
平成8年度	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	6年以上	副婦長	婦長
最大	220	160	270	280	150	255	250	190
最小	0	0	0	0	0	0	0	0
平均	79	80	92	91	81	71	78	73
勤務人数	24	32	19	28	12	50	27	18

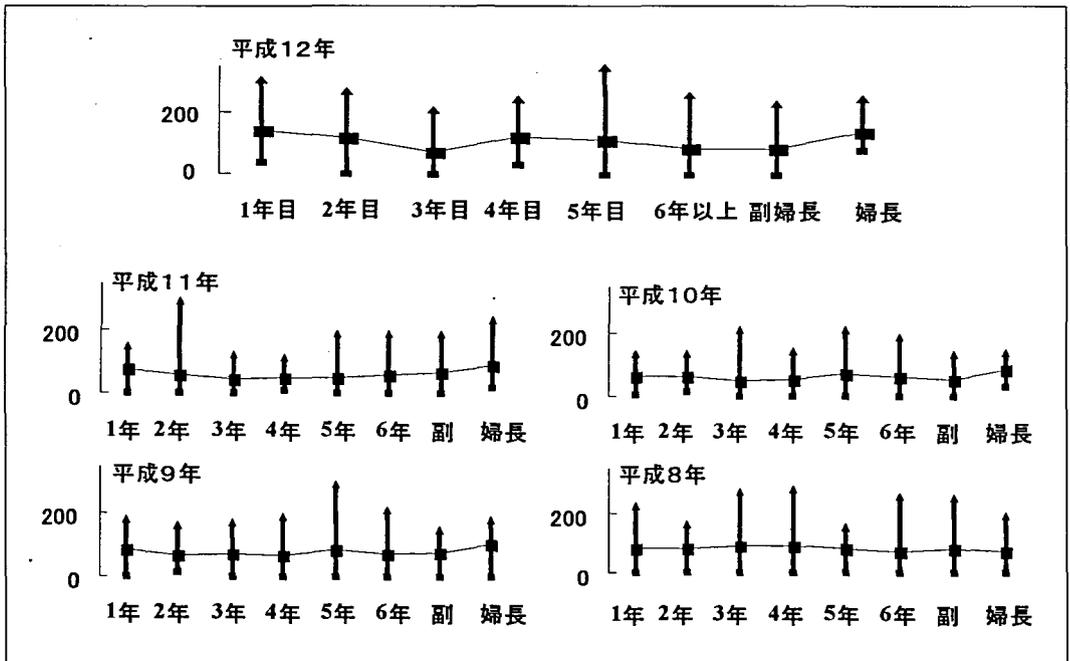


図2. 看護婦経験年数別時間外業務時間

3) 勤務形態による比較 (図3. 図4)

3交替勤務では日勤・準夜・深夜とも時間外勤務時間が多く、2交替3交替ともに日勤の時間外勤務時間が多かった。年度推移でも平成10年を除いて日勤の時間外が最多であった。

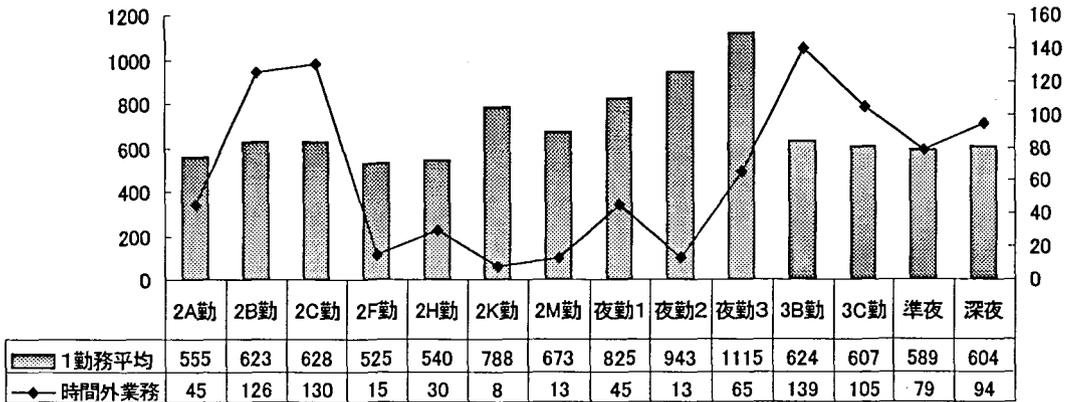


図3. 勤務形態別1人1勤務平均総業務時間と時間外業務時間

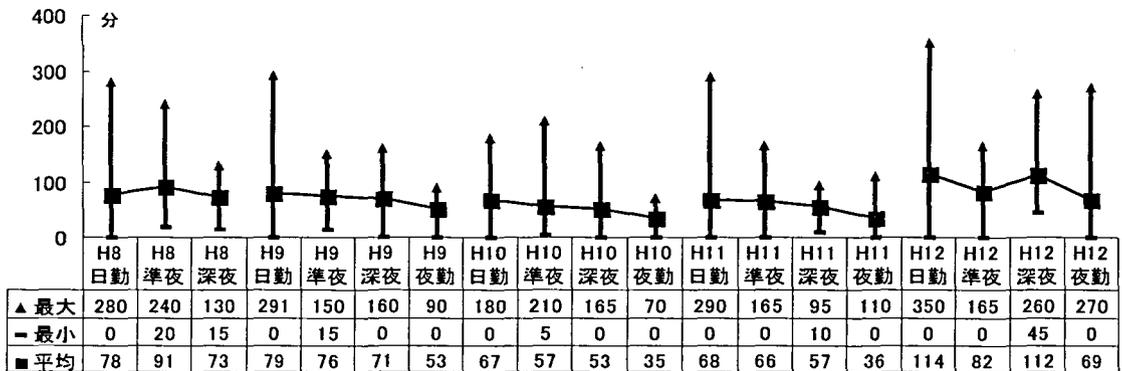


図4. 勤務別時間外業務時間の年度比較

4) 勤務形態別の時間外業務内容について (平成12年度)

① 日勤の勤務前には2292分の時間外業務があり、内訳は情報収集が46%、薬剤業務が14%、この2項目で60%をしめる。

勤務後では12755分で、記録が33%、薬剤業務が10%、カンファレンスが6%で3項目の計が49%になる。

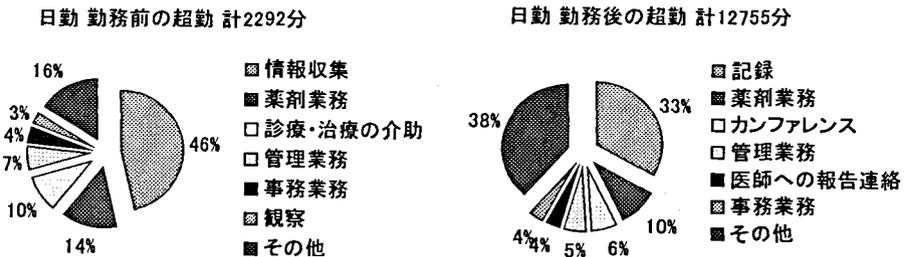


図5. 日勤の時間外業務内容

② 夜勤帯の勤務前では準夜・深夜・夜勤とも情報収集が60%以上であり、次いで薬剤業務が14%～27%であった。(図6)

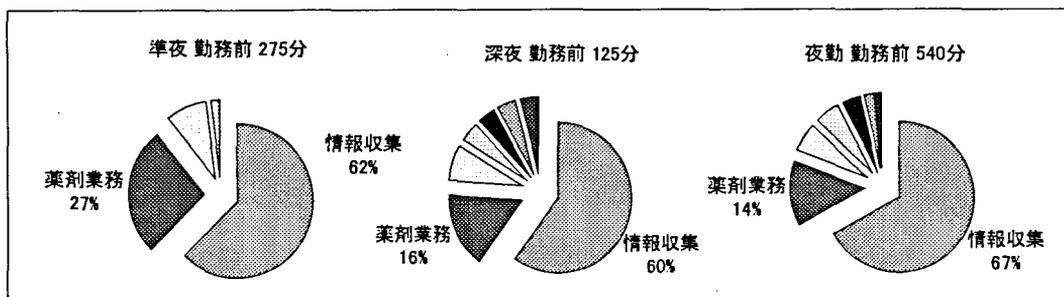


図6. 夜勤帯の勤務前の時間外業務

③ 勤務後では各勤務とも記録が40%以上で、2番目は準夜と深夜が引継ぎで、夜勤は診療治療の介助であった。(図7)

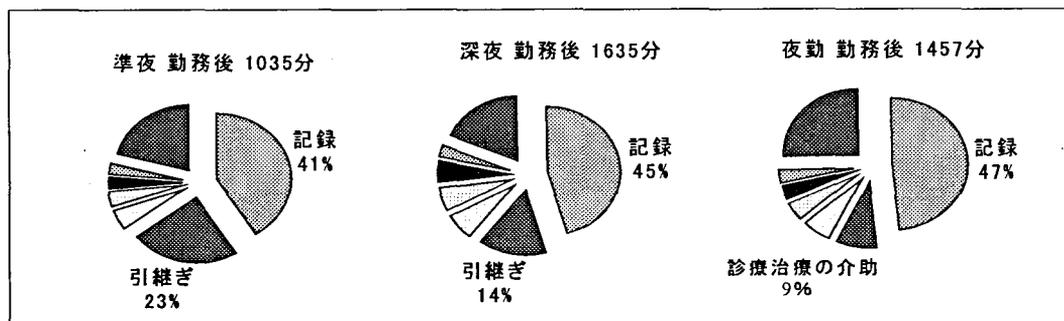


図7. 夜勤帯の勤務後の時間外業務

5) 病棟別時間外業務の年度推移 (図8)

時間外業務時間をもっとも多いのは東6病棟の2435分で過去3年間1位である。ほとんどの病棟が今年(平成12年)は時間外勤務が増加したが東3病棟は310分と今年も少なかった。(図8)

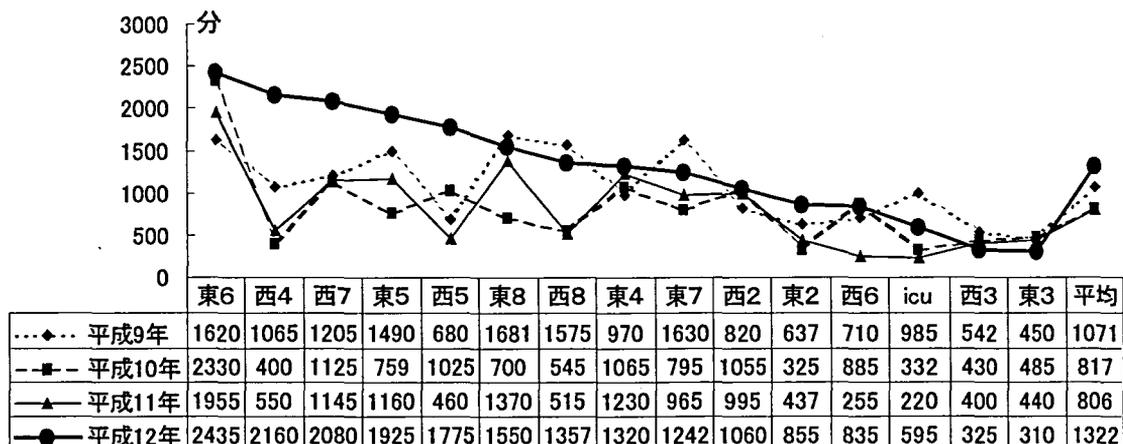


図8. 病棟別時間外業務時間の年度推移

#### 4. 考 察

看護業務量をタイムスタディー法で調査した結果の報告は文献をあたっても見当たらなかった。

日本看護協会1982年（昭和57年）の職能委員会の15分間隔でのワークサンプリングの結果と現在の本院の調査結果を比率で比較してみると、20年前の調査の結果でもNS間の報告連絡と記録がトップであった。<sup>1)</sup> 全業務量の中でこの2項目が占める割合は現在と殆ど変わっていない。業務改善や記録方法の変更、看護教育の変更など看護界にも大きな変化の波がいくつもあったが、当時から殆ど変わらないで、上位を占めていることは、看護業務としてどうしても必要項目となっていることが伺える。時間外業務が無い組織でありたいと願っているが、現実にはどうしても規定の業務時間では溢れてしまう。時間外業務が無いように業務計画を立案しても、患者の状態、看護婦の資質、医師との関係で、思うように終了しないことが多い。始業前に患者の情報収集をしたり看護記録の確認をおこなうなど、患者情報の収集をしなければ、分担された看護がおこなえない状況にあり、見えない状況での勤務時間が延長している。業務中の看護記録は、ケアに追われ、終了した後でないと書けない状況になっている。婦長は業務計画が無理だとわかっていても、婦長ともども残業をして、日々のケアを終了させている。日本の看護ケアは患者との契約ではないために、いくらやっても際限が無いほど患者の要求も多く、今後は、どれだけの看護ケアを提供していけば良いのか検討する必要がある。時間外におこなっている看護記録も時間を短縮する、ケアマップを使用するなど記録の方法も検討を要する。薬剤業務も時間外に徐々に増加しているが、患者に安全な薬剤の提供をおこなうために、薬剤の確認作業や、薬剤のミキシングなど、病棟薬剤師との薬剤業務の連携をおこなっていく必要がある。

#### 終わりに

業務量調査は昭和56年に日本看護協会が全国調査をおこなって以来、調査の困難性などから殆ど継続しておこなわれておらず、比較するデータが無かった。本院では平成1年より12年間継続して調査がおこなわれてきた。調査が業務改善に果たす役割がなかなか具体的にならないで、困難を極めている。その都度婦長会議で話し合いをおこない、業務改善の年間目標をたて、実施してきたが、大きな変化を起こすことはできなかった。看護方式や、患者の重症度による傾斜配置など大きな変革が無いと比較ができるほどの差を見出す事は難しい。この調査結果は今後の看護業務量と看護ケアサービスを検討する時の重要なデータとなることであろう。

#### 参考文献

- 1) 日本看護協会看護婦職能委員会：看護業務調査報告，日本看護協会出版会，76-96，1981.
- 2) 日本看護協会看護婦職能委員会：看護業務指針，日本看護協会出版会，1996.